
龍神さんと幻想郷

胡桃と柿の種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍神さんと幻想郷

【Nコード】

N6952S

【作者名】

胡桃と柿の種

【あらすじ】

ある日突然龍神になりました。妖怪でもあるそうです。大変ですが、しかもタイムスリップするし、恐竜いるし、俺なんかしたかな？と言つか世の中は俺が嫌いなんだろ

† 東方キャラ出るの二回からです。
†

始まりのはじまり

最近では政治・経済ともに急降下中、これからのご時世お金とか職とか色々めんどそうじゃん？つーか、高校生に対してさ。言う事じやなくね？先生とか何若者の夢をプチュツと潰しちゃう訳？

我ら勉強する気ない組をどうにかしようって魂胆だろうけどさ。他のメンバーの心を骨折させたらダメじゃね？まあ、あいつらがどうなるうが関係ないんだがな、それにそんな脅し効かないし、勉強めんどいし、遊びたいし、異世界行ってみたいし。

最後のは関係ないか。サーセン
んでもって、この状況はなんだろう？

「シダ類の植物？」

前方シダ類、左シダ類、右シダ類、後……

「……な〜んだ。夢か〜だよな〜。恐竜とかあり得ないもんね〜」

ゆ〜っくり近づかんで、マジ怖いから！！これってあれだよな！
？かの有名なティラノサウルスさんですよねええええ！？

うわー！！食らいつかうとするなー！！！！

「てめつ、やめろー！！」

走れ！マジ全力で走れ！食われたくねえ！あれの食事とかマジ勘弁！！え〜とえ〜と武器は！？何か何かあああああ！？

「石があんじゃんか！」

拳大の石を拾い上げて思いっきし投げつける。助かりや恩の字だけどさ。望み薄だけど

よし、見事に額に命中。敵兵の沈黙を確認、接近して現状把握に努めます。

死んでいないようです。額に石ころが命中したため気絶した模様、俺強え

一撃ノックダウンとか世界狙えるんじゃないから無理か。そうだね

と、一安心所で兎に角ここは何処だ！？日本だよな？日本ですよ？

……喉乾いた。てか、疲れてなくな？俺、あんだだけ全力疾走したの久々なんだけど
頭をぽりぽり……こっん

「こっん？」

なでなで

これは……角？鬼みたいな前にシャキーンだとか横へシャキーンじゃなくて前頭部？（およそおでこより上へ数cmの所）から後ろへゆるつと鹿の角みたいなのが生えていた。まさかと思ってケツ付近を確認………にゆるつと尻尾が生えておりやした。先っぽが毛でふさふさの

「わーい。なんかスゲー進化したっぽい俺」

嬉しくねえ…とりあえずさ。現在の自分の姿を見たいから水辺に行こう。見た目だけは知りたい。すつこく

「オーケー、見た目は変わらず角&尻尾が生えたのと左目のみ青になったと」

さっきのTrexが居る事からそろそろ絶滅する時期だろうし避難場所を探さねば、死にたくないし

だから、洞穴かどつかにヒッキーしたいんだけど、身体が痒い。なにこれ超ムズムズするんだけど…あれ？視線高くなってるのか？もう一度覗くか？いや、でもなんか嫌な予感しか…

「龍…？」

疲れてるんだな…さつさと洞穴探してヒッキーしよう全力で急ごう。一大事だ。

で、結構簡単に発見出来ちゃうもんなのね…搜索開始5分で発見とか早いな。

「けど、龍なのは変わらず。誰かこの状況を説明して欲しいが人がいねえからな」

寝よう。そして、出来れば起きたら人類が居ると嬉しい。ではお休み

夢の中か

「やあ、『俺』」

俺自身が出てくる夢とか見たくなかったな。

「そうかい？それより状況をしつりたかったんじゃないの？」

そうだけどさ。自分に教えてもらうのってさ

「とりあえず、さつき隕石落ちたから」

うえ！？それ本当？俺被害受けてない？

「洞穴の入り口が塞がっただけだから大丈夫」

コタツに入って自分自身となに喋ってんだか…まあ、いいや、説明お願い俺にも分かるような

「簡素に言つと龍神」

龍神？水の神様の？

「そうそれになった。まあ、生活に支障はないっしょ？」

いや、あるっしょ。神様になっちゃったんだからさ。支障あるに決まってるじゃんか

やっぱ、『俺』だから頭は悪いな。なんか逆に安心した。

「とにかくさ。起きる時代は旧石器だから頑張れ女顔」

うるさいよ。俺が女顔ならお前も女顔だよ。

て言うかさ。年表頂戴、何時代が何時か分かんないから

「無理だろ。これ夢だよ？常識的に考えなよ（笑）」

うつざ、お前マジうつざ

「頑張れよ瑞貴」

なんかないの？神様パワー

「〴〵程度の能力ならあるけど？」

なにか教えてよ。

「能力を操る程度の能力とあとなんだっけ？忘れた」

はあ！？なんだよ！二番目なんだよ！

「そろそろお別れだ。じゃあね」

逃げんなああああ！！

妖怪と神

起きたよ。身体の節々がポキペキ鳴らせながら背伸びしたはいい
んだけどさ。この目の前にあるお供え物はなんだろう？あのクソ野
郎の言葉を信じるならばここは旧石器なんだけど、自然信仰でしょ
？偶像崇拝の文化なんかあったっけ？まあ、俺には関係ない（はず）
だけど

とりあえずお供え物で食事、そこまで美味くないななんか腐りか
けてる気もしないでもないけれど…この際だから気にしない。腹痛
も神様クオリティーでなんとかなるっしょ、なつて貰わないと困る。
腹イタとかマジ勘弁なんですけどね。っーかさ。話変わるけど能力
を操る能力とか俺最強じゃん。冗談抜きで

さてと、燃料補給も済んだ事だし探索しに行こうかな。当分安全
な時代だしのんびりと行こう村訪問とかさ。暇だし、神様だし

コトン……

「え？」

「ん？ああ、この傍に村ってない？」

タッタタッ

あれ？逃げちゃった？龍の状態よりかは怖くないと思うんだけど
なあ。結構営業スマイルは自信あったのになんかシヨック…

やあ、俺

夢の中でしか登場出来ないんじゃないの？それとも俺の幻聴？

なんとも言うてていいけど、忘れてた事を伝えにきた

神様パワーの事？それで二番目のはなんなの？ハンドパワー？

天候を操れるよ。まあ、頑張ればそれ以外も操れるけどさ。これは龍神になって付いた能力なんだけど元からある能力はも一つあるよ。圧力を操る程度の能力これは自分で考えて

能力のレベルアップ的な物？圧力はなんとなく分かるからいい。

そうそう。あと君は根本的には妖怪だから神力・妖力両方ともあるから

妖怪なの？神様なのに？お前馬鹿？？？

俺が馬鹿ならお前も馬鹿だろ？俺自身なんだから

はいはい。そうでした。

とりあえず、妖怪は生きるほど強くなるからガンバ、疲れたからまたね。あと俺強くな？って思っていたらそれ間違いだから能力を操るって言うても劣化版の能力が使えるようになるだけだし、回数制限あるし、三回だけだし三回使ったらもう使えないし

あつ、また逃げやがった……くそお、めんどくさくなったりしたら消えるとか達悪いな。まあ、自分の現状が分かったからまあよしとしよう。そうしないとやってられん。つーか、程度の能力とか東方？だとしたらさ。妹様の為に保存しとかないと死ねるだろ。

と、なんか大勢で帰ってきたな。石器持ってきてるけどさ俺に何する気？こっちは戦う気なんかさらっさらないんだけど

「何者だ!？」

「あ、え」と神様？」

「そんな訳がない! お前の様な女が神な訳がない」

オーケー、今なんつった? 女つつったよな?

「女つつったよな? お前」

「それがなんだ」

石槍持つてるから、旧石器じゃなくて縄文時代くらいか…なら竪穴住居があるから一つに雷でも落として帰らせよう。見える範囲での殺生は好まんが、視界外ならどうぞご自由にだ。

そもそも神様だけど、俺妖怪だし? 妖怪、つつたら人食うつしょ? ならいいじゃんと悪魔の俺が言うけどさ。良心的に却下、おそろくやつたら後で吐く。

けど、イライラしてるから何かストレス発散の方法を!

「何をしたら信じる? 雨でも降らそうか?」

「やれるものなら」

「はいはい」

指パツチーン。はい、土砂降り。ざまあ、縄文人マジざまあ

俺を馬鹿にした報いだこのバカ野郎、もういっちょバカ野郎、啞然としてるからもういっちょ指パツチーン、晴天なり、晴天なり

「どうよ」

「……………」

はっはっはっ、言葉も出ないかねワトソン君そりゃそうだろう。

なにせ、目の前で天気がころころ変わったんだからな。俺なら腰を抜かしていたぜ。これは本当

「よ……」

「よ？」

「妖怪だあああ!!」

「妖怪ですけど神様でもありますよ!？」

あつぶね、いきなり槍投げつけてきやがった。てか、逃げるベ
きだよね?こんな狭いスペースじゃどうも出来なさそうだし、空気
を圧力で凝縮させて楯を作ってと

うをつ、また飛んできた。急ごう、即急にここから脱出せねば……
なんて焦ってた頃の自分が嫌になっちゃう。何これむっちゃ簡単に
包囲網を抜けたんだけど、拍子ぬけ過ぎる。正面から走って突
っ込んでったら悲鳴上げて道を譲ってくれた。ビビリというかなん
というか……コメントし辛い。

それから言うもの、各地を転々としましたよ。まったく20
0年くらいふらふらしていると、風の噂でなんかすんげー暴れてる妖
怪が3匹居るとの話を耳にした。弱らせて封印してやろうか?3匹
とも

あゝくそ、俺は逃げ回ってんのに普通に過ごしてるとか腹立つな。
うん、封印しに行こう。そして湖に沈めよう。そうだそうだ。それ
がいい。

「すみません」

「どうかしましたか？」

もちろん、妖力は隠してますよ？襲われるから

「何か妖怪が暴れてるって噂を聞いたんだけど、どこ？」

「ああ、西に山を3つ越えた所ですよ」

「ありがとう」

さて、飛ぶか？飛んじやうか？飛ぼう。マッハで飛ぼう。今の俺はイライラMAXだぜ！どうしてやろうか？まずは捻ろう。んでもって潰す勢いで圧力をかけるか。

着いたはいいけど、ホント暴れたっぽいね。建物倒壊してんじやん

「そんで、その妖怪ってどこだ？」

「クククク…女が残って居たとはな…しかもめんこい女子おんなではないか」

そんなに俺って女顔か？つか、お前まで言うか。バカ野郎

「退治しに来てやった。感謝しろよ？」

「人間如きに俺様がやられる訳がないだろう！」

「潰しちやおつかな」

「隙だらけだ！」

性格出てるね、一直線に突っ込んできてくれるなんてさ。空気をまたまた凝縮して見えない檻を作ってっつと

「そもそも、誰が人間だなんて言っただかな？」

「妖怪！？」

「4割で驚くとか、君弱すぎ、しかも俺男だし」

「馬鹿な！？」

「まあいいや、いい事を教えてあげる。俺の手の上に水があります。」

圧縮して飛ばしたらどうなるでしょうか？」

檻の隙間すべてに水滴を配置、んで圧縮して発射、蜂の巣になるがいい！はははっ、ストレス発散じゃ！

「なんでも貫くんだけ？」

はっはっはっ、これで十分弱っただろう？なら封印するだけだ。丸めて神力で作った玉に入れて蓋するだけ。ねえ、簡単でしょ？潰してもよし、保存してもよし、酒に漬け込んでもよし。まあ、不味いだろうけれど……

おっと、別の二人が来たようだ。妖力を嗅ぎつけてきたか……

「や、お二人とも駆けつけるのがお早いようで」

「なんだ？こいつ、死にに来たのか？」

「どうでもいいでしょう？さっさと片付けて進みましょう」

「まあそう言わないでゆるりとしていつておくれ」

「それじゃ、お言葉に甘えましょうか？」

あるえ？攻撃が見えない？頬つぺた殴られた。拳が消えたからスピードでも上げてるのか？いやしかし、俺が視認できないって無理があるだろう？なら消してるのか？

「なに？コイツ攻撃が効かない！？」

「まあ、そう焦んなさんな。時間はあるだろう？」

「うおらああ！！」

あつ、これは危ない。切られちゃう、それだけは避けよう。うん、殴っててきたのに拳圧がなんであんな鋭い刃の様なのが出るのだろう？ふむ、考えられるのは二人とも能力持ち、しかもさっきの猪突

猛進くんより数段上

これはちよいと厄介だねえ。じゃあ、水鉄砲でもいつとく？

…って、避けんなよ。うおっ服切れた！？

いやさ。一番最初に倒したヤツみたいに弱いと思ってたんだけどさ。この強さで二対一とかないわ。

水鉄砲避けんなよ。潰さないといけなくなんじゃないか。

「そんなもの？」

「お前じゃ俺達に勝てねえよ」

「しかし、能力持ちだとは思ってなかったよ。三回しか使えないから温存しようと思ってたけどやめた。全力でいく」

あの鬼野郎（女だけど）が可視を不可視にする程度の能力で、狼男（なぜか日本在住）が打撃を斬撃に変える程度の能力、両方とも達悪いな……殴られるしシャツ切れるし…

よし、両方とも劣化コピー終了。圧力と併用してつと、空気中の水分を圧縮、周りを囲むように数百・数千で配置、でも見えない様になってる。微妙に見えるけどさ、大丈夫っしょ？

「発射」

ふはははっ、脅えろ！疎め！能力の長所を生かせぬまま封印される！みじん切りだぜヒヤッハー！

ゼーハーゼーハーしてる所悪いけど封印しちまうぜ。

「ほい、封印。いや、ちっちゃくなつたね」鬼神にウルフマンになんかよくわかんないの」

叩いても無駄だぜ？神力で出来てるからそのボール。

さてと、それじゃあ念のためにあの池と湖の間くらいにあそこ

に沈めて、更にデカイ封印結界を張りーの、あいつらに維持するために妖力を回復する毎にそれを供給させてつと、なんだ年間三割分だけか…残りは俺が供給してつと、うん、完璧

封印も終っちゃったしどうしよっかなあ。やることないしなあ

「そうだ。水ん中で番人ごっこしてよう。あいつら話し相手にはなるだろうし。うん、そうしよう」

人間が耐えられるくらいの圧で空気のある空間を作つてつと、よし完璧

あとは底に封印した玉を置いたら完璧だぜ。

基本寝て過ごす事しばし、何やら水辺から気配を感じた為浮上、なにさね。時代的には鎌倉あたりか？

「何？どうかした？」

「おお！龍神様、我らをお助けください」

あるえ？この格好、まだ弥生なの？時間経過のズレ？水の中だと時間遅くなるん？まあ、いいか

「封印の番人してたからさ。状況がわかんないんだけど、説明頼める？」

「はい！お任せください」

元気いいねえ、おじさん長生き出来るんじゃない？んで、なにやら話によると神様同士が戦争してるらしい。人間を引き連れてが、しかしここらの人達はどちらにも付かずこの地に残ってい

たらしい。「龍神様にしかお遣えしません！」の一点張りで、うん、俺ちよっぴり感動、俺を慕ってくれる人間がこんなに居るなんてなあ

「神同士の戦争？大和と八百万の争いか……」

「我らは龍神様に付いていきます」

「ふむ……」

仮にもだ。ゝ程度の能力が存在する事から仮定すると諏訪子とか居る東方の世界の確率が非常に高い。ならば、八百万側が大和に負ける訳だが、大和側に付いては面白くもなんともない。とまあ、そっち方面で考えてたけど、諏訪子んところを訪問したらすぐに帰って防衛策を練ろう。うん、そうしよう。

「分かった。ちょっと片方の大将に会いに行ってくるから、少しの間よろしく」

「お任せください」

「じゃあ、任せた。会ったらすぐ帰るからな」

久々に龍になるかあ。飛ぶ時はあれが一番速いし

鴉天狗なんて目じゃないぜ！龍神ナメンな。マッハマッハ！襲われんよう神力消しとこ妖力は出すけどさ。まあ、単純に神力出しっぱで飛ぶと雨降るんだよね。にわか雨だけど

「よし、前方より神力確認、目標まで残り僅か」

えーと、このままだと撃退されるだろうから、着地&人モードに変身、なんか最近ちょびつと付いた霊気を出して…

いざ、神社へ！

「何処に居るんだ？諏訪っ子」

本拠地だからか、どこにいるか分からん。いつその事、神力＋妖力を三割くらい出すか？臨戦態勢で来るだろうけど

「せい」

しーらね。もうどーなってもしーらね。中々出て来ない諏訪子が悪いんだからねっ！

「諏訪っ子」

「名前を変にしないでくれる？」

「おっ、やっときたな諏訪っ子」

「だからっ……はあ、もういいわ。あんたは誰？」

「周りの人間にばれっかもしれないけど、俺龍神、ほれ」

神力・妖力全開、脅えろ！すく（ry

「？ 何脂汗流してんのさ？ただの龍神さんだぜ？」

「なら聞くけど龍神ならなんで妖力があるの？」

「あゝ、妖怪生まれの龍神育ち？妖怪兼龍神だからなあ」

「じゃあ、なにこの大容量の妖力！あんた化け物！？」

「化け物とはなんだ。人間が生まれる前から生きていただけだろうに」

「ちなみにいくつ？」

「そうさな。数千万といったところか」

俺も歳をとったものだ。そろそろ、なにか弊害が出るのではと歳を思い出したあたりで思った。なに、思い始めた時に差など無いさ。

「なに考え込んでるのさ？」

「あと少し生きればお前にも分かるだろうよ。若き神よ」

「あんた何様？」

「それはいいとして、神奈子とはまだ戦っていないのか？」

「誰それ」

「ふむ、知らぬならば良い。精々頑張れ」

「あんたはどつちにつくの？」

どちらに…か、どちらにもつかんな。なにせ俺は俺を信じる人間を守るだけゆえ、四季の季節折々のその人間が住まう場所ごと、な

「どちらにもつかないよ。攻めてくれば大和であろうが八百万であろうが葬るのみだ」

「あっそ」

「だが、決戦は見に来よう。気になる故」

「そう、じゃあその時を楽しみにしてるわ」

「そうしろ。俺ももう爺だ。娯楽として眺めさせて貰おう。それと歳を思い出させてもらった。ありがとう」

久しく言っていなかった言葉が出たものだ。人間として過ごしたのは数千万も遠い昔以来だろうか？これも神に感謝か。妖怪であり龍神である。

矛盾だ。妖怪は人間を怖れさせる者、神は人間を導く者、その両者が混合されている。妖としての力を見せなければ人間は俺に助けを乞う。妖を見せれば逃げ踊るだろう。人間とは愉快な物だ。

「名前は？」

「名か……芽滝とでも名乗っておこう」

妖怪と神（後書き）

途中で主人公のキャラが変わっているのは仕様ですww

神様大戦

ここ数日、何事もなく平凡な日々が続いていた。村に大和の神や八百万の神が降り立つ事もなく、戦場いくさばとなる事もない。ただ平凡な日々、見せかけ上の平凡、人間は今日もゆつくりと時間を踏みしめながら人生を歩んでいた。これも良き事

「されど、俺は大忙しだ」

両陣営の神々がここをどうにかしようとする事来ること、今週に入り大小合わせミリオンだ。ザコは潰せば良い。猛者は牢に捕え斬り裂けばいい。諏訪子から何も聞いていないのだろうか？八百万の神々は

そして、今日珍しい客が来た。妖怪である。なにも考えることなくふらりふらりと現れた。俺を見つけた後しばし、時間を置いてからゆつくりと歩み寄ってきた。

「やあ、俺」

「久しいな。俺」

「実体を持てたからね。遊びに来たよ」

「ああ、そうか。しかし俺はお前『瑞貴』ではない。芽滝だ」

「つれないね」

「己故、思考くらい分かるであろう？」

「それは無理かな。君が俺を切り離れたんだから」

そうであつたか？人間の歴史よりも長く生きてきた故、昔の出来事など忘れたよ。季節は初夏、日々強くなる日差しの中人間は食料を確保する為、汗水垂らして働いている。励む事もよい事だと思いが時には体を休めることも大切だぞ？

そこまでは俺もめんどろを見きれないがな。

「『瑞貴』よ。俺であるのならお前は何か目的があつて来たのではないか？」

「そうそう、一つだけ消滅する前にしに来たんだ」

「消滅？ふむ…同じ存在は並行して生きられぬと言う事か」

「まあ、そんな感じ。芽滝は三つも能力あつて困らない？」

「そこまで不憫はせぬが面倒である事は否定出来ぬな」

「だから俺は来たんだよ。二つに減らしてあげるよ」

「能力を消すのであれば御免被ろう」

「消すんじゃないから大丈夫。天気と圧力を合わせるだけだから」

「ならば頼もう」

「まかせて」

俺に手を掲げて力を入れ始めた。ふむ、なんにも感じぬがうまくいつているのだろうか？わずかながら肥大化したような感覚があるがこれだろうか？劣化コピーしたものは健在であるが…

「終わったよ」

「どうなつたんだ？」

「驚くことに能力がくつついたら二乗三乗レベルで強くなつちやつた。『自然を操る能力』」

「ずいぶんと凶悪になったと思うのは、俺が平和ボケしたからだろうか？」

「違うけど…とにかくこれで本当に会えるのは最後だから、じゃあね」

「さらばだ。我が分身よ」

「どうかなさいましたか？龍神様」

「ああ、俺は旅に出る故、しばらく留守にする。ああ、あとこの地を幻想郷と呼べ」

「分かりました。龍神様お元気で」

「と、忘れるところであった。最後に人だろつが妖であろうが神であろうが来る者は拒むな。よいな」

「はい」

『瑞貴』という存在が消えてしまったが感慨に耽るなど無い。なに故、妖怪であるから。悲しむ事はない自然に帰ったのだ。元ある場所へ

さて、そろそろ神奈子が諏訪子の元へ着いたであろつ。ゆるりと観戦しに行こうか。日差しも気持ちが良い。爺の散歩には丁度良いだろつ。新緑の森にある獣道を歩く、木漏れ日で地面に出来る影と光のコントラストが綺麗だな。

半日ほど歩いたがまだ着かない。そろそろ景色に飽きてきた。飛ぶか…

「時は金なりと言うほどであるからな。急ごつ」

そうだな。着いたらそばの湖で喉でも潤そう。あそこの水は上手いからな

諏訪大社では、小さな神が俺を待ち構えていた。妖力・神力ともに出していなかったはずだが、何故ばれたのだろつ？まあ、いいか

「久しいな。諏訪子」

「なんか更に偉そうになってない？」

「そう思つならばそう思っていて構わぬぞ」

世間体などあまり気にせぬからな。何を言われようが気にしない

「それで、大和はまだここを攻めてこぬのか？」
「まだだよ」

「ふむ…その割には殺気と言っべきか…闘気が徐々に近づいているが、それではないのか？」

「そうみたいだね」

「数日間、ここで寝泊まりして待とうと思ったのだがな」

「あんた本当に自由奔放よね」

「褒めるな」

「褒めてない！」

ふむ、俺に精神的攻撃など無駄だぞ？

おお、来た来た。ほれ、諏訪子前から御柱が迫っているぞ。

「気を抜くな。これくらい止める」

「え？いつのまに？」

「まったく…ついにボケたか？」

「ボケてないよ！」

「やや、そうであつたか。こりゃ失敬。それでだが、大和の神が一柱来ているぞ」

「洩矢諏訪子。貴女の神社をいただくわ」

背中にあるしめ縄の輪つか、なんかあんなのを背負ったMSいなかったか？ラインが光るヤツ

まあいいか。んで？洩矢の神社の取り合いか。

「それで、その神は？」

「関係ないからな。観戦させてもらおうぞ」

「え！？こつち側じゃないの！？」

「何を言うか。俺はどちらにもつかないぞ？死なないようにするには止め

るが、な」

ささ、始めな。俺は見物と洒落込もうじゃないか。

胡坐をかいて座り込んだ俺をジトーと諏訪子が睨んできたが知らん。すぐに諏訪子は神奈子へ鋭い視線をむけ鉄剣を取り出す。ふむ、結構な代物だな……宝剣か何かか？おつ、鱗取れた。あとで水切りでもしよう、鱗で。

時間はそろそろ一日を過ぎようとしている。右から左からと弾幕合戦が続いている。ミジャクジは諏訪子を援護しているが、神奈子の御柱を受けてかなりの数がノックアウトされている。たしか、ここって酒置いてあったよな？ならそれでも取ってこようかね。

「おい。その巫女、酒はあるか？」

「ありますけど……」

「ああ、よいよい。自分で取りに行こう」

御神酒だろうな。まあ、妖でもあるが大丈夫であろう。龍神であるからな

さて、どうなった？ たった二柱の大戦は。ふむ、諏訪子が劣勢か…

「巫女、社への被害は出てはおらんか？」

「あ、はい」

「二人もまだまだだな……」

未だに俺が念のために張っておいた結界に傷一つ付いていない。
まあ、俺は二人よりも長くは生きてはいるが、まさか傷も付けられないとは思ってもいなかった。

「ふむ、巫女よ。賭けをせぬか？」

「賭け…ですか？」

「うむ、お前が勝てばこの鱗をやる。俺が勝った時は酒を注いでもらおうか」

「いいですけど……」

「ならば、神奈子が勝つに俺は賭けよう」

「諏訪子様はお勝ちになります！」

さて、少し手を出すとするか。御柱と諏訪子の間に高圧水流を十字に組めば……さあ、どう避ける？いきなり四つに分かれるはずだが

「え！？うわっ」

「え？」

まさか、見事に当たるとは思っていなかった……そして、それで決着がつこうとは思ってもいなかったが、まあ、なんだ。まだまだ、成長途中な訳だ。この幼い神々は

「世話が焼ける……おい、諏訪子。大丈夫か？」

「きゅっ……」

「今度はあんたが相手？」

「や、それは遠慮しておこう。結果は見えているからな」

「それは、私が負けると言う意味で？」

「はっ、笑わせるな。この爺が勝てるわけなかつ？」

それで興味をなくしたのか本殿の方へと入って行った。さて、酒でも飲むとするか。

「おい。巫女、約束通り酒を注いでもらおうか」

「はあ……」

「ふむ…今宵はよい満月だ」

月見酒も一興よ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6952s/>

龍神さんと幻想郷

2011年10月7日01時29分発行